内藤新宿（道と宿）

1 内藤新宿の成り立ちと変遷

江戸時代の甲州道中で、江戸から最初の宿場、江戸への最後の宿場であったのが内藤新宿です。当初、甲州道中の江戸から最初の宿場は下高井戸宿でした。しかし、元禄 10 年（1697）、浅草阿部川町の名主である高松喜兵衛たちが、運上金 5600 両を支払うことで宿場開設を幕府に願い出て、翌元禄 11 年 6 月に許可されました。そして幅 5 間半（約 10m）の道を開き、左右に家を作って移り住んだといわれています。内藤新宿が開発された理由には、下高井戸までの距離が遠かったことが挙げられています。その後、元禄 12 年 2 月に宿場として開設、同年 4 月に宿場業務を始めました。

しかし開設直後の元禄 15 年（1702）、正徳 6 年（1716）と、相次いで大火に見舞われ、内藤新宿は大きな被害を被りました。このため、宿場開設にあたり約束した運上金も、享保 3 年（1718）には 1136 両の未納となっていました。

享保 3 年（1718)10 月、内藤新宿は幕府から宿場を廃止する命令を受けます。原因は甲州道中に利用者が少ないこと、旅籠の女性がみだりに旅人を引き入れたことなどが挙げられています。

その後宿場再興の嘆願がたびたび出されますが、宿場廃止後 54 年たった明和 9 年（1772）2 月 20 日に、宿場として再興し（明和の立ち返り）、明治に至るまで存続しました。

2 内藤新宿の範囲

展示模型では、石垣がある四谷大木戸の少し先に、甲州道中の通りをふさぐように木戸が設けられています。ここは現在の新宿一丁目交差点付近（新宿区立四谷区民センター西側）で、宿場東境の出入り口となります。そこから通りを西に向かう両脇が内藤新宿の宿場です。宿場東境から模型のほぼ中央にある太宗寺東側付近までは下町、さらに太宗寺前から甲州道中、青梅街道に分かれる現在の新宿三丁目交差点にあたる追分の東側付近までは仲町、ここから追分を過ぎて甲州道中沿いでは、模型上の天龍寺の西側にある通りを横切る石樋付近まで、青梅街道沿いでは、現在の伊勢丹西側にあたる木戸までが上町でした。この上町西側の境が宿場西境で甲州道中、青梅街道から江戸に向かう際の、内藤新宿出入口でした。宿場の長さは東西 9 町 10 間余り（約 999m）ありました。

大木戸

太宗寺

追分

内藤家屋敷（青色の部分）

3 宿場の役割

宿場としての内藤新宿は大きく分けると 2 つの役割を持っていました。1 つは公用交通の際に定められた人足と馬の提供と手紙を搬送することで、もう 1 つは宿泊施設を設けていることでした。

①人足と馬の提供（問屋場（といや））

公用交通の際、幕府から朱印状や証文を与えられた旅行者には、宿場は無償で人馬を提供しました。その他の交通では人馬を利用する際には駄賃（だちん）という金銭を払いました。武士が旅行する際に人馬が必要な場合は、決められた賃銭で利用しました。この賃銭は人馬の種別により決められていました。

内藤新宿から江戸までは、荷物 1 駄（40 貫〈約 150 kg）を馬に載せる本馬（ほんま）が 67 文、馬上に人と荷物 20 貫（約 75 kg）

までを載せる乗掛(のりかけ)が 67 文、馬に人と荷物 5 貫 (約 19 kg) まで載せる軽尻(からじり)が 44 文、荷物 6 貫 (22.5 kg) を人が運ぶ人足が 34 文、下・上高井戸までは本馬 78 文、乗掛 78 文、軽尻 52 文、人足 40 文という賃銭が決められ、明和 9 年 (1772) の内藤新宿再興の際には高札に記されました。これ以外の一般の旅行者も余裕があれば相対で賃銭を決めて利用できました。

また宿場では公用交通のために、一定の人馬を常備することになっていました。内藤新宿の場合、当初人足 50 人、馬 50 疋でしたが、後に 25 人、25 疋となりました。このうち人足 6 人と馬 3 疋は急用に備えて囲人馬(かこいじんば)として一般には使用しないで備えていました。

公用交通では、事前に連絡が入り (先触(さきぶれ))、宿場が人馬を用意します。しかし、万一用意できない場合には、周辺の村々から人足と馬を提供させました。これを助郷(すけごう)と呼びました。内藤新宿の場合、宿場開設当初、助郷はありませんでしたが、後に 24 村が設定され、宿場再興時には隣接する 33 村が助郷とされました。

これらの人や馬を用意し、提供するのが宿場の中にある問屋場(といやば)の業務です。内藤新宿では宿場のほぼ中央、太宗寺の近辺にあり、何回か移動しているようです。展示模型では太宗寺の甲州道中を隔てたほぼ正面に設けられています。

問屋場には公用交通である書類を改める「御朱印場(ごしゅいんば)」、宿場への人馬の出入りを記録する「帳附場(ちょうづけば)」、次の宿へ荷物を積み替える「荷附場(にづけば)」が設けられ、その問屋場の長である問屋、問屋を助ける年寄、宿場への人馬の出入りを記録する帳付、馬や人足に荷物を振り分ける馬指(うまさし)(馬差、人馬指ともいう) が務めていました。

正徳6年 (1716)
高松家文書絵図 (東京都公文書館) より

②宿泊施設 (本陣(ほんじん)と旅籠(はたご))

宿泊施設の中で、大名のような大規模な公用交通の宿泊施設が本陣です。本陣は公用交通利用者の宿泊、休息施設として設けられました。天保 14 年 (1843) 頃、内藤新宿には建坪約 90 坪 (約 297 ㎡)、門構えと玄関が付いた本陣が仲町に 1 軒あり、脇本陣はありませんでした。展示模型中にも本陣と特定できる建物はありません。しかし、本陣を宿場の名主が交代で務めたり、脇本陣が本陣役を務めたこともありました。参勤交代利用が他の五街道に比べて少なかったことも、本陣、脇本陣が常設されていない一因と考えられます。

大名以外の多くの旅人が宿泊したのは旅籠です。内藤新宿設立当初の旅籠の数は不明ですが、天保 14 年頃の状況とされる「甲州道中宿村大概帳」では、大間口と小間口を合わせて 24 軒ありました。明和 9 年 (1772) の宿場再興時の計画では 52 軒でしたが、実際には 23 軒にとどまりました。その後 40 軒まで増加しましたが、寛政 12 年 (1800) の計画では 36 軒に修正しました。これらの旅籠の中には格式の高い玄関や、書院を持つものがありましたので、必要に応じて旅籠が本陣の役目を務めていたと考えられます。

旅籠は旅人を泊める施設ですが、食売女 (飯盛女(めしもりおんな)) を置くこともありました。内藤新宿では宿場開設当初から食売女がいたようですが、明和 9 年の宿場再興時に 150 人の食売女を旅籠に置くことが認められ、再興時に江戸の商人たちが内藤新宿の旅籠経営に進出する大きな要因となり、その後も宿場繁栄の大きな基盤となりました。展示模型の中では、通りに面した側の家屋の裏側に細長い家屋が付いているものが旅籠と類推できます。

新宿御苑の北側にある御苑トンネル建設時、旅籠で使った大皿や碗など、大量の陶磁器類が発掘されました。大皿や碗の中には、江戸時代に内藤新宿にあった旅籠や旅人が休息する茶屋の屋号や店印が釘書で刻まれているものがありました。江戸時代の人々が内藤新宿で楽しんでいた様子が目にうかびます。